

島田市民病院泌尿器科における手術統計 (1987年～1991年)

島田市民病院泌尿器科 (科長 : 宮川美栄子)

宮川美栄子, 木原 裕次*, 水谷 陽一**

羽瀧 友則***, 岡垣 哲弥***, 松岡 直樹

STATISTICS OF THE OPERATION AT DIVISION OF UROLOGY, SHIMADA MUNICIPAL HOSPITAL: 1987~1991

Mieko Miyakawa, Yuji Kihara, Yoichi Mizutani,
Tomonori Habuchi, Tetsuya Okagaki and Naoki Matsuoka
From the Division of Urology, Shimada Municipal Hospital

A recent 5-year (1987-1991) statistic survey was carried out on the operations experienced at the Division of Urology, Shimada Municipal Hospital.

(Acta Urol. Jpn. 39: 877-880, 1993)

Key words: Statistics, Operation

緒

言

1987年1月から1991年12月までの5年間における島田市民病院泌尿器科手術統計を行ったのでその結果を報告する。

島田市は人口約7万の地方都市で、最近の15年間はほとんど人口増加が認められない上、周辺には500床以上の病院が設備とスタッフを整えてきており、静岡市には県立こども専門病院もある。したがって島田市民病院のテリトリーはしだいに減少しているのが現状である。

方

法

1987年から1991年の5年間の手術台帳をもとに統計を行った。同一患者で同じ手術を複数回行っている場合も(ESWL等)おのおの1件と数えた。また膀胱全摘および尿路変更術はおのおの1件と数えた。ただし悪性腫瘍に対するリンパ節廓清は原則として別項にはせず、原発巣摘出術に含めて考えた。また尿路変更時に施行した虫垂切除術は件数に加えなかった。

結

果

入院患者数: 男女別入院患者総数は、1987年は男性90人、女性25人、計115人、1988年はおのおの178人、47人、計225人、1989年は201人、54人、計255人、1990年は224人、70人、計294人、1991年は244人、71人、計315人であり、最近2年間は約300人と一定化している。

年度別・性別手術件数 (Fig. 1): 総手術件数は Fig. 1 に見るごとく増加傾向を示しているが、当院では1990年11月より Lithostar が導入され ESWL 症例が加わったため、これを除くと1989年をピークに1989~1991年はおのおの265件、257件、218件となり減少傾向をしめしている。総手術件数に占める男性の比率を見ると1987年の86.5%を最高に低下の傾向を示してきたが1990、1991年は約80%に一定化している。年齢分布、平均年齢については一定の傾向は認められない。各年度の平均年齢を男女別に見ると1991年を除きいずれの年も女性の方がやや高い傾向にある。年度別にみた60歳以上の人が占める割合は、87年41/89(46%)、88年95/212(45%)、89年164/267(61%)、90年165/297(56%)、91年143/330(43%)であり、1989年の61%が最高ではかかはほぼ40~50%を占めている。少なくともこの年度内においては高齢者が増加傾向にあるといえる数字は示されなかった。60歳以上の人に

* 現: 武田病院泌尿器科

** 現: 京都大学医学部泌尿器科学教室

***現: 京都大学大学院

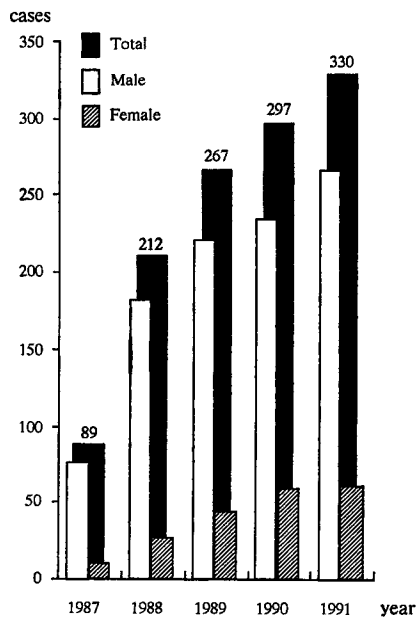


Fig. 1. Frequency of operation & sex distribution

における男女比をみると、1987年の78% (32/41) 以外は他のどの年も男性が81% (77/95, 133/164, 134/165, 116/143) であった。60歳以上の高齢者がほぼ一定であるのに対し20~50歳代がやや増加し10歳代が減少している。70歳以上、80歳以上についてみても、いずれも増加傾向が明らかとはいえない。

尿路結石に対する手術 (Table 1): 処置を必要とする結石患者は、1990年11月 ESWL の使用許可がおりるまですべて県下の他院に依頼していたため極端に症例数が少なくなっている。患者の希望で尿管切石術も8例に行われている。PNL, TUL はおのおの5例、28例で PNL の1例を除きいずれも ESWL 導入以前の症例である。1991年の PNL 1例は珊瑚状結石に対するもので ESWL との組合せで行っている。1990年尿管切石術の2例の内1例は ESWL で割れず入院期間の短縮を希望され行ったものである。

前立腺肥大症に対する手術 (Table 2): 5年間を平均すると TUR-P が76%を占め、恥骨後式前立腺摘除術が24%を占めているが、Table 3 に示されるように TUR-P の割合が年々増加している。当院では経直腸の超音波断層法で当初は 30 mg 以上であると診断したものは観血的手術をしてきたが、TUR の技術の向上とともに変化させている。

悪性腫瘍に対する手術 (Table 3): 症例数は多いとはいえず、年によるばらつきが多く一定の傾向は見られない。根治的膀胱摘除術は13例で尿路変更は

Table 1. Operation for the urolithiasis

	Ureterolithotomy	PNL	TUL	ESWL	Total
1987	2	0	6	0	8
1988	4	2	13	0	19
1989	0	1	6	2*	9
1990	2	1	3	40	46
1991	0	1	0	112	113
Total	8	5	28	154	195

1990.11 Lithostar 使用許可 * デモ機器使用

Table 2. Operation for the benign prostatic hypertrophy

	Retropubic prostatectomy	TUR-P	Total
1987	13 (100.0%)	0	13
1988	13 (46.4%)	15 (53.6%)	28
1989	9 (15.3%)	50 (84.7%)	59
1990	12 (22.6%)	41 (77.4%)	53
1991	4 (6.7%)	56 (93.3%)	60
Total	51 (23.9%)	162 (76.1%)	213

Indiana Pouch 10例, Ileal Neobladder 2例, Bricker 1例である。根治的腎摘除術は17例、腎尿管摘除術が7例であった。根治的前立腺摘除術は10例におこなっている。リンパ節廓清の段階で中止したものはこれまでに1例のみであった。

尿路変更術 (Table 4): Nephrostomy が16例あるが、悪性腫瘍の進展に伴うものは6例でほかの10例は結石あるいは UPJ または UVJ stenosis に対する一時的なものである。最近はずべて外来の検査室で行うようになっている。Bricker's operation を行った内の1例はコントロールが不可能であった Radiation Cystitis に対して行った尿路変更術である。Cutaneo-stomy はいずれも進行膀胱癌に対して行っている。Ureteroileocystostomy は TUL による尿管断裂に対する処置として行った。Indiana Pouch および Ileal Neobladder はすべて膀胱癌に対する全摘出術に伴う尿路変更術として行ったものである。

その他の手術 (Table 5): 尿管膀胱逆流現象に対する手術は1987~1991年はすべて Cohen の方法で行っている。UPJ-stenosis の症例はわずか3例にすぎなかったが、Anderson-Hynes による Pyeloplasty が2例で Endopyelotomy は1例だった。

腎臓に対するその他の手術は Simple Nephrectomy 8例, Partial Nephrectomy 2例、いずれも結石あるいは先天性の UPJ-Stenosis の末期で無機能腎あるいは部分的に萎縮して感染源になっている症例である。腎嚢胞に対する Cyst puncture およびアル

Table 3. Operation for the malignant tumors

	1987	1988	1989	1990	1991	total
Radical Nephrectomy	1	2	5	7	2	17
Nephroureterectomy with cuff	2	1	2	0	2	7
Radical cystectomy	0	6	4	2	1	13
TUR-Bt	7	15	26	22	17	87
Radical prostatectomy	0	2	4	1	3	10
amputation of the penis	0	1	0	1	1	3
Total	10	27	41	33	26	137

Table 4. Urinary diversion

	1987	1988	1989	1990	1991	total
Nephrostomy	1	5	7	3	0	16
Bricker's operation	0	0	0	2	0	2
Cutaneostomy	2	0	1	0	0	3
Ureteroileocystostomy	0	1	0	0	0	1
Indiana pouch	0	6	4	0	0	10
Ileal Neobladder	0	0	0	1	1	2
Total	3	12	12	6	1	34

Table 5. Micellaneous

	1987	1988	1989	1990	1991	total
anti VUR	0	3	2	1	6	12
Endopyclotomy	0	0	0	0	1	1
Pyeloplasty	0	0	0	1	1	2
Simple Nephrectomy	2	2	0	4	0	8
Partial Nephrectomy	0	1	0	1	0	2
Renal cyst puncture	0	4	10	13	4	31
Partial Cystectomy	0	0	2	0	0	2
Castration	2	8	14	16	10	50
Orchiectomy	7	4	4	5	0	20
Orchidopexy	7	12	6	2	3	30
Epididymectomy	1	0	2	0	0	3
Vasectomy	2	8	5	7	6	28
High ligation	2	4	2	1	3	12
Circumcision	13	23	18	16	26	96
Dorsal incision	2	7	13	5	6	33
Urethrotomy	0	0	3	1	2	6
Caruncle	2	3	3	8	2	18
Prolapsus urethrae	3	0	1	0	2	6
A-V shunt	0	0	7	14	8	29
CAPD	0	0	0	3	7	10
Total	43	79	92	98	87	399

コール注入例は31例になる。1989, 1990年は大きな嚢胞に対してはたとえ症状がなくてもかなり積極的に puncture を行ってきたが, 穿刺1年後に進行性の腎癌が発見され, 嚢胞壁の近くに RCC があるのを見

落としていた可能性がある症例を経験した。穿刺により画像診断が困難になることで, このような症例を見落とす可能性がある点を反省し, 以後無症状のものには穿刺を行っていない。

膀胱部分切除術が2例ある。これは膀胱憩室腫瘍と尿管管嚢胞に対して行ったものである。Castration 50例はすべて前立腺癌に対するものである。Orchiectomy 20例の内精巣腫瘍に対するものは9例のみで11例は高齢者の停留精巣や外傷によるものである。その他 Urethrotomy はすべて外傷性の尿道狭窄に対して内視鏡的に行った。カルンケル切除、尿道脱の手術はそれぞれ18例、6例である。A-V shunt 造設、CAPD-tube 挿入はそれぞれ29、10例であった。

麻酔：5年間の手術総数は1,195件であるが、このうち全身麻酔は211例(17.7%)である。それに対して脊椎麻酔は497件(41.6%)となり、麻酔科に依頼するものがほとんどであるが麻酔管理が比較的容易なものは自科で行っている。硬膜外麻酔や、仙骨麻酔もわずかではあるが含まれている。局所麻酔は全体の約20%である。結局麻酔科依頼は全体のおよそ半分である。ESWL については hydroxyzine 25 mg 筋注、indomethacin suppo 50 mg を術前に投与し、術中の

疼痛に対し penta-zocine 静注を追加投与している。

結 語

1)年間入院患者数は徐々に増加してきたが、最近の2年間は約300人で固定した。

2)手術件数は ESWL を除くと減少傾向を示した。年間の平均件数は約200件となった。

3)60歳以上の人が占める割合はほぼ40~50%であった。

4)前立腺肥大症に対する手術は年間50~60件で、全体の約18%になった。

5)悪性腫瘍の手術は年間約30件で、全体の10~15%であった。

6)全身麻酔は全体の約18%、脊椎麻酔は約42%を占めた。

(Received on March 30, 1993)
(Accepted on May 12, 1993)